

## 学徒動員中の終戦

太宰府市 石松 恵美子

昭和20年8月15日、その日も朝から蝉の鳴く暑い日であった。

朝のラジオニュースに、「何事かしら」と耳を傾けたのは私一人ではなかったと思う。正午から重大発表が有るとのこと、敗戦が噂されている時期でもあり、もしかしてと思ったが家族の誰も口に出す者はいなかった。その日、私は耳下腺炎で工場を休んでいた。昼のニュースが始まる頃には誰言うともなくラジオの前に集まった。何となく聞きづらい音声の中、アナウンサーの案内のあと、玉音放送が始まった。全文は記憶にないものの、「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで……」と初めて聞く天皇陛下のお言葉に涙が止まらなかった。今思えば、天皇陛下のお苦しみは計り知れないものだったろうと理解出来ても、当時14や15才の私には、「これ程一生懸命働いてお国のために頑張ったのになぜ無条件降伏といった形で終戦を迎えなければならなかったのか」とくやしさをいっばいだった。泣いている私を見て、まだ小学生の妹は「どうして泣くとー」と心配そうに私に近づいて来た。学徒動員の経験もない幼い妹には私の泣いている姿が理解できなかつたようであった。横にいた父は、妹にも解るようにお言葉の意味を説明して聞かせた。妹は「それではもう空襲警報はないね」と喜んだが、私にはまだ実感としてとらえることが出来なかった。

そして翌日、父母の心配をあとに工場へ向かった。西鉄柳川駅に着くと、あちらこちらで昨日からの事を話す人々を見かけた。

工場に着くと、先ず守衛室の雰囲気のがらりと変って感じられ、工場内は妙に静かで、職場へ行っても誰一人仕事をしている者はなく、方向を失った人々の様子は空虚さだけが強調された一日であった。だらだらと一日を過ごし、いつもより早い退社の指示で駅へ向かった。次々に超満員の電車が通りすぎ、やっと乗ることができたものの、停車駅ごとに窓から乗り込むしまつで、秩序の乱れた光景を見て悲しい思いをした事は今でも忘れることは出来ない。アメリカやソビエトの軍が乗り込んでくるようなデマが乱れ飛ぶ中、夜に入り、婦女子は避難しなければいけないとの噂で、リュックサックにいろいろと詰め込んだりもした。父は一つの木箱を持ってきて床の間に置いた。そして「もし外人に殺されそうな時はこれで」と言って自害する方法を教えてくれた。結局は避難することもなく、2、3日後からは学校にもどることが出来、今では笑い話のような思い出である。

私達柳河高等女学校（現在伝習館高等学校）47回生は昭和20年1月24日より、学校で軍需作業に従事する組と、三瀧の工場へ行く組に分かれ、それぞれの職場に配属された。私達の職場は工場とは言ったものの、何の設備も整っていない酒蔵に手を加えた建物で、外見は酒蔵その物であったが、飛行機の補助タンクを作る工場だった。竹で編んだ網代を型造りして内側にカゼインを塗り、ペーパーをかけたあとワラビ糊で和紙を貼り、乾いたところでまた和紙

を貼るといった工程を繰り返し、出来た2つのわんがらを合わせてタンクの型にし、下張り上張りの後シブ塗り、ラッカー仕上げをして器具を取り付けて出来上り、と今考えれば極単純な作業ではあっても、軍需産業の一端を担う大事な職場だった。私はわんがらの内側に紙を貼る6班で、仕事にも割合に早く馴れ、それなりに楽しく、お国のために役に立っているとの自負をもって一生懸命働いた。一日中で一番楽しい時間と言えば、昼食であった。皆の広げるお弁当は、馬鈴薯入りは良い方でトウモロコシ、コーリヤン等々おいしそうに見えてもまずい食べ物だった。食後のわずかな時間には、作業台の隅に教科書を広げ寸暇を惜しんで勉強する人の姿もあった。私達の働いていた三瀧の工場には、終戦の間際まで防空壕もなく、久留米空襲の時には駅前の芋畑にしゃがみ込んで、ロッキードの編隊が去って行くのを今や遅しと見守った。また終戦を2ヶ月後に控えたある日の昼下がり、急に米軍機の来襲で身のちぢむ思いをしている時、屋根裏の高い窓から空をみていると、上空からヒラヒラと舞い落ちて来る物があり、その内の2、3枚がすぐ近くの田んぼの中に落ちた。私は夢中で仲良しの友達と二人ではだしのまま走って行き、探し当てた物は、その米軍機からまかれた宣伝ビラであった。「防空壕の上の南瓜はうれましたか」といったものと、もう一枚はアメリカとソビエトが日本列島をまたいで握手している絵であった。2人は拾った宣伝ビラを得意げに持ち帰り、先生にさんざん叱られた事を今でもはっきり憶えている。

その頃から敗色はますます濃く、伝習館の運動場にも焼夷弾が落とされ、それと前後して、諸富空襲では、隣に住んでいた国鉄職員の方が開閉橋の監視をしていて、機銃掃射で銃撃され遺体で帰って来られた。

夜の空襲では、照明弾の光りが夜空を照らし、近所の人達と恐怖におびえながら土手の下を走りまわって一夜をすごした。

こうして夜昼となく出される警戒警報、空襲警報、敵機来襲に夜もモンペ姿で枕元には救急袋、防空頭巾を置いて寝たものだった。現代では考えられない貴重な体験をしたことは当時としては当然の事であったとしても、戦後50年を迎え戦争経験者が年々減り、私達の孫が同じ年頃となった今思うことは、人類がこの世に存在する限り、どのような形でも私達の子孫には同じ経験を絶体にさせてはいけなと思うし、戦時中体験したさまざまな事を風化させないためにも、少しでも語り継いで平和の尊さを考える年にしなければいけないと思う。